

二〇二〇年度

問題冊子

国	教
語	科
国	科
語	目
12	ページ数

検査開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 検査開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 検査終了時には、解答用紙の1ページ目を表にし、机上に置くこと。解答用紙は、解答の有無にかかわらず回収する。
3. 検査終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私が日本画とクレオールの関係について考えはじめたのは数年前に遡る。何気なく、『ジャズ ニューオリンズからフリー・ジャズまで』(ヨアヒム・E・ベレント著)という本を手にとった時のことだ。そこには、ジャズの発祥がニューオリンズのクレオール文化に由来することが説かれていた。そして、スタイルの変遷を追っていく全体の構成から、ジャズが発祥からそのスタイルを目まぐるしく変えていったことが理解できた。同書では強調されていなかったが、両者つまりクレオールであることとスタイルの変遷には密接な関係があるのではないかと私には思われた。近代における日本画の成り立ちと多様性、またその後の様式変化のことをネットウに置いていたからであろう。

クレオール(英 creole、仏 créole)とはクリオリヨというスペイン語に由来する言葉で、アメリカの植民地時代から使われはじめたとされる。本来は植民地に生まれたネイティブ以外の白人移民を指したが、やがて混血、さらには白人の血が混じった黒人を指すのが一般的となった。一方、クレオール言語といえば、植民地で宗主国の言語と現地語が混成した言語のことである。シンガポールで話される訛りの強い英語をシングリッシュと呼んで、もはや英語ではなくクレオール言語と認識されているような例が挙げられる。わかりやすく言えば、国際結婚によって生まれたハーフに近いものといえるのだが、バイリンガルであったり二重性格であったりとか二つのものが溶け合わずにハイゾンする^①というよりも、むしろ異種混交によって母体に対して変化するようなものができる場合に、クレオール化と呼ぶのである。その意味ではハイブリッドにきわめて近いが、しかし、お互いの優れた点を人工的に交雑して品種改良を目的としたのがハイブリッドのゲンギである^②。それに対して、クレオール化とは基本的に何らかの植民的環境が生じたことにより、忝忝なくその環境に順応するためにネイティブが変化することを前提としている。

翻って日本画とは何かを考えた時に、そもそも中国からの強い影響によって、古代から変化を遂げながら現象してきた近世までの日本絵画は、中国絵画に対するクレオール絵画であったと言えることができる。中国から見れば、日本絵画は訛りの強い中国

画だったと見做されるかもしれない。そして、十九世紀後半、近代化＝西洋化という開化の波の中で、西洋絵画の圧倒的な影響を受けた日本絵画は、日本画と洋画という二つのクレオール絵画を生み出した、と言うことも可能なのである。クレオール絵画が人工的なハイブリッド絵画を意味するものではないことはすでに述べたが、言うまでもなく、それは突然変異的な特殊で一时的な絵画でもなく、別種の個体同士を無理矢理に継ぎ接ぎした怪物(キメラや鵄)でもなければ、ましてやフランケンシュタインでもない。

本書では考察の対象としていないが、日本の洋画を考えると、それはまさにシングリッシュであって、西洋からみれば詭りの強い西洋画というに相応しい。その存在価値は、西洋美術との懸け橋であるはずのものでありながら、実際には日本社会だけに通用し西洋社会ではほとんど意味を持たない。そのことは、私たちが西欧の美術館を訪れた時に、たとえ日本美術コレクションがある館に出会ったとしても、近代日本洋画を積極的に蒐集しているところはまったくなく、という事実を裏付けている。

西洋諸国から見た日本の近代洋画が、そうした扱いを受けることは不当というより寧ろ自然なことと言える。実際、日本の美術館で韓国や中国の近代洋画を積極的に蒐集しているところが皆無であるという事実からも、それは証明されている。では日本画はどうだろうか。残念なことに、近代日本画もまた、海外の美術館では積極的な蒐集対象となっていない。フェノロサや岡倉天心との関係が深いボストン美術館は例外だが、それでも岡倉歿後の近代日本画、例えば横山大観や上村松園などのスタンダードな作品をボストン美術館は収蔵していない。つまり、西欧の主要美術館で近代の日本画を見ることはきわめて稀なことであり、ましてやある程度系統立てて蒐集している美術館は皆無と言ってよい。西洋社会に認められたいという目的を持って生まれた日本絵画の近代化は、結果的に西洋社会から等閑視されたのである。近代日本画とは何かを問おうとする時、こうした西洋からの視点も十分に考慮すべきであろう。

古代から現代までを範囲とする『日本画入門』という一般向けの概説書があり、また、「日本画と呼ばれている絵画は千数百年

の歴史があります」(『図解日本画用語事典』)と書かれた技法専門書があるように、法隆寺金堂壁画や源氏物語絵巻にはじまり現代の作品に至るまで、全ての絵画を日本画と呼ぶことがある。しかし一方で、美術史の専門研究者たちは、伊藤若冲じやくちゆうの作品を日本画とは呼ばず、江戸絵画ないしは近世絵画と称している。これは、日本画概念を広く捉えようとする傾向と、限定的に捉えようとする傾向が混在していることを示している。専門家が日本画という概念を限定的な歴史用語と見做すのは、日本画という言葉と概念が近代になって洋画という言葉と概念に対して(創られたもの)であることによる。つまり、洋画が登場してはじめて意味をなす日本画という近代的概念を、近世以前の絵画にまで適用していくのは伝統までも(創る)ことになるのだという考えである。そうであれば、日本画という概念は近代に限るのがダウトだという主張も容易に納得されるところだろう。

本書における日本画概念もまた、基本的にこの限定的な捉え方によっている。とすれば、日本画というだけで近代という歴史性を帯びるのであるから、わざわざ近代と断らなくともよいことになる。しかし、敢えて近代日本画としているのには理由がある。日本絵画史における近代日本画の意味を問うことは、すなわち、その近代性ないしは近代的表現とは何だったのかを問うことだからである。日本画の問題は概念、制度、主題、技法・材料等、様々な視点から論じることが可能であり、また必要でもあるが、なかでも表現の問題とは、筆法、彩色、構図といった造形要素が織りなす、スタイル(様式)の問題に他ならない。そこにはどのような近代性を見出すかが論点となるだろう。

非常に複雑なことになってしまいが、実は、近代における日本画のなかには近代性を帯びない日本画も存在する。例えば近世以前のスタイルを完全に模倣したもの、あるいは時代と切り離されたまったく独自のスタイルを持つもの、そして、あまりにも時代を先取りしているようなザンシン④なスタイルを持つものである。それらは、近代日本画というよりも近代に生まれた日本画のうちのひとつと呼ぶべきであろう。

(古田亮『日本画とは何だったのか 近代日本画史論』。なお、一部省略した箇所がある。)

当^{タル}二一年^ニ 三七二十一、故曰^フ延^{フルコト}寿^ヲ二十一年^{ナラント}。臣^フ請^フ伏^{シテ}於^ニ陛^ニ下^ニ以^テ
^①司^レ之^ヲ。星^{レバ}不^レ徙^ラ、臣^フ請^フ死^{セント}之^ニ。公^{ハク}曰^ク、「可^{ナリト}」是^ノ夕^也、星^ニ三^{タビ}徙^シ舍^ヲ、如^シ子^ノ
章^ノ言^ノ。

(『新序』)

- 〔注〕 1 景公―春秋時代の宋国の君主。 2 熒惑―火星の別名。 3 心―天の二十八宿の一つ。宿は星座。
4 子章―宋国で天文をつかさどる役人。
5 分野―天の二十八宿に地上の諸国を対応させて分けた区域。心は宋国に対応するとされた。
6 歳―穀物のみのり。 7 饑―凶作。 8 舍―とどまる。また、とどまる場所。
9 行―移動する。 10 陛下―宮殿の階段の下。 11 司―観察する。

問一 傍線部①・⑤の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。なお文末の「と」は省略して構わない。

問二 傍線部①は具体的に誰を指すか。本文中から漢字二字を抜き出して答えよ。

問三 傍線部②を、適切な言葉を補いつつ現代語訳せよ。

問四 傍線部③を、すべて平仮名で書き下せ。なお文末の「と」は省略して構わない。

問五 傍線部④の現象の理由を、子章はどのように考えたか、天と景公の關係に言及しつつ説明せよ。

[4]

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。)

宋景公時、熒惑在^レ心。^{〔注1〕}懼^レ召^ニ子韋^一而問曰、「熒惑在^レ心、何也。」子韋曰、「熒惑天罰也。心宋分野也。禍当^ニ君身^一。雖然可^レ移^ニ於宰相^一。」公曰、「宰相所^レ使治^レ国也。而移^レ死焉、不祥^{ナリ}。」^{〔注2〕}寡人請自当^也。」子韋曰、「可^レ移^ニ於民^一。」公曰、「民死、將誰君乎。」^{〔注3〕}寧^レ独死^耳。」子韋曰、「可^レ移^ニ於歲^一。」公曰、「歲饑、民餓必死。為^ニ人君^一、欲殺其民以自活、其誰以我為君乎。是寡人之命固^モ尽矣。」^{〔注4〕}子無^ニ復言^一矣。」子韋還^カ走、北面再拜曰、「臣敢賀君。天之^レ処^レ高而聽^レ卑。君有^ニ仁人之言^一。」^{〔注5〕}三。天必^ズ三賞^レ君。今夕星必徙^レ舍、君延^{ブル}寿二十一歲。」公曰、「子何以知^レ之。」对曰、「君有^ニ三善^一。故三賞、星必^ズ三舍。」^{〔注6〕}舍行^ニ七星^一、星

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「密接な関係がある」とあるが、なぜなのか。その理由を簡潔に説明せよ。

問三 傍線部②「日本画と洋画という二つのクレオール絵画を生み出した、と言うことも可能」とあるが、なぜこのように言えるのか。本文全体を踏まえてわかりやすく説明せよ。

問四 傍線部③「結果的に西洋社会から等閑視された」とあるが、なぜ「等閑視」されたのか。簡潔に説明せよ。

〔2〕

次の文章は、昭和六年に発表された堀辰雄「あいびき」の一節である。これを読み、後の問いに答えよ。

……一つの小径こみちが生い茂った花と草とに掩おほわれて殆ほとんど消えそうになっていたが、それでもどうやら僅かにその跡らしいものだけを残して、曲りながらその空家へと人を導くのである。もう人が住まなくなつてから余程になるのかも知れぬ。それまで西洋人の住まっていたらしいことは、そのささやかな御影石みかげいしの間に嵌はめこまれた標札にかすかに A. ERSKINE と横文字の読めるのも知られる。

その空家は丁度あた或るやや急な傾斜をもった坂道の中腹にあった。一たいに坂道というものがどれでも多少人を夢見心地にさせる性質のものである。そういう坂道の中途まで来てふと足を止めた瞬間、ひよいとそんな荒れ果てた庭園が目に入るので、人はますますその空家を何だか夢の中でも見ているような気がするのである。

或る日のこと、その坂道を一人の少年と一人の少女とが互いに肩をすりあわせるようにして降りてきた。小さな恋人たちなのかも知れない。そう云えば、さつきから自分等のための love-scene によいような場所をさんざ⑦捜しまわっているのだが、それがどうしても見つからないですつかり困つてしまつているような二人に見えないこともない。――

そんな二人がその坂の途中まで下りて来て、ふと足を止めて、そういう絵①のような空家とその庭とを目に入れたのである。それを見ると、二人は互いに目と目とでこんな会話をしたようだった。「ここなら誰にも見られっこはあるまい」「ええ、私もそう思うの……」

そう決めたのか、二人はその坂の中腹から彼等の脊せぐらいある雑草をかき分けながらその空家の庭へずんずんはいつて行った。ちよつと不安そうな眼つきで横文字の書いてある標札をちらりと見ながら。……

その庭園の奥ぶかくには、彼等が名前を知らないような花がどつさり咲いていた。少年はその一つの叢くさむらを指しながら、

「やあ、薔薇ばらが咲いていらあ……」と、いくぶん上ずった声で云った。

「あら、あれは薔薇じゃありませんわ」少女の声はまだいくら少年よりも落着いている。「あれは蛇苺へびいちじよ。あなたは花さえ見

〔注〕

- 1 老人ども―尼君とその邸に仕える人々。
- 2 「われかくて」の歌―浮舟が詠んだ歌。
- 3 月のみやこ―京の都のこと。心理的に隔絶した都を「月」になぞらえて表現した。
- 4 右近―浮舟の乳母子。
- 5 常の人―常住して仕えている人。
- 6 かやうの人に―以下、浮舟の心中を語る部分。
- 7 見しわたり―薫・匂宮など、かつて関わりを持った京の人々のあたり。
- 8 この御方に言ひわきたる―浮舟づきの侍女として尼君の手元から分けた。
- 9 都鳥―名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」によつた表現。
- 10 くはしきこと―浮舟を引き取つた経緯など。

問一 傍線部⑦、①を現代語訳せよ。

問二 傍線部②「月のみやこ」、傍線部③「都鳥」は、それぞれ先行する物語作品を踏まえた表現である。その作品名を答えよ。

問三 傍線部④「今は限りと思ひはてしほど」を、具体的な状況がわかるように現代語訳せよ。

問四 傍線部⑤「かかる人々にかけても見えず」とあるが、浮舟が京から通う人々に姿を見せないのはなぜか、説明せよ。

問五 傍線部⑥「世の中にあらぬところはこれにやあらん」とあるが、浮舟がこの地を別世界のように感じるのはなぜか、説明せよ。

[3] 次の文章は、『源氏物語』手習巻の一節である。浮舟の女君は、二人の男性・薫・匂宮に愛され板挟みとなつて入水を図るが、結局果たすことができず、見知らぬ尼君らの一行によつて救われる。次の場面は、浮舟が自らの素性や過去を隠したまま、尼君らとともに都を離れた山里で暮らしていく場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ出でつつさまさまの物語などするに、答ふべき方もなければ、つくづくとうちながめて、

⑦ (注2) われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに (注3)

① 今は限りと思ひはてしほどは、恋しき人多かりしかど、こと人々はさしも思ひ出でられず、ただ、親いかにまどひたまひけん、乳母、よろづに、いかで人並々になさむと思ひ焦られしを、いかにあへなき心地しけん、いづこにあらむ、我世にあるものとはいかでか知らむ、同じ心なる人もなかりしままに、よろづ隔つることなく語らひ見馴れたりし右近などもをりをりは思ひ出でらる。

若き人の、かかる山里に今はと思ひ絶え籠るは、難きわざなりければ、ただいたく年経にける尼七八人ぞ、常の人にてはありける、それらがむすめ、孫やうの者ども、京に宮仕へするも、異さまにてあるも、時々ぞ来通ひける。かやうの人につけて、(注7) 見しわたりに行き通ひ、おのづから、世にありけりと誰にも誰にも聞かれたてまつらむこと、いみじく恥づかしかるべし。いかなるさまにてさすらへけんなど、思ひやり世づかずあやしかるべきを思へば、(注8) かかる人々にかけても見えず。ただ、侍従、こもきとて、尼君のわが人にしたる二人をのみぞ、この御方に言ひわきたる、みめも心ざまも、昔見し都鳥に似たることなし。何ごとにつけても、世の中にあらぬところはこれにやあらんとぞ、かつは思ひなされける。かくのみ、人に知られじと忍びたまへば、まことにわづらはしかるべきゆゑある人にもものしたまふらんとて、(注10) くはしきこと、ある人々にも知らせず。

れば何でも薔薇だと思ふ人ね……」

「そつかなあ……」

少年はすこし不満そうに見える。それから二人は黙つたままその空家のまわりを一巡して見た。窓硝子がところどころ破れている。が、その破れ目から二人がいくら脊伸びをして覗いて見ても、ひっそりと垂れている埃まみれのカーテンにさえぎられて、その中の様子はよく見えなかった。それでも台所のところなどは内部がちらりと見えた。そこなどはいろんな台所道具が雑然と散らかつていて、中には倒れたまんまのものもあり、そしてそれらのものは一面にこぼれた壁土のようなもので埋もれていた。どうやら震災の時からそっくりそのままにされているらしい。この家の持主である外国人は震災の時死んでしまったかも知れない。——二人はその空家を坂の途中から最初見たときふと彼等の心に浮んだ或る考えをいつか忘れてしまったかのように、そんなことばかりしゃべり合っている。

が、その家の裏手に、その庭園から丁度露台へ上るような工合にして直接にその家の二階へ通じているらしい、木蔭のからんだ洋風の階段を見出した時に、少年よりいくぶん早熟しているらしい少女は思い切つたように言った。

「ちよつとあれへ上つて見ないこと?」

「うん……」少年は生返事をしている。

「そんなら私が先へ行くわ……」

それでもと云いかねて、やはり少年は自分が先に立つてその木蔭のからんだ階段をすこし危なっかしそうな足つきで上つて行つた。が、その中途まで上つたかと思つと、少年は急に足を止めた。その壁の上に彼の顔を赧くするような落書の描いてあるのを発見したからである。少年はくると踵を返すと、

「やっぱり悪いから止そうよ」と云いながら、ずんずん一人で先に降りてしまった。少女はそこに一人きり取り残されて、しばらく呆気にとられているように見えたが、やがて彼女も彼のあとを追つた。

そうしてそのまま二人は彼等の love-scene には持つてこいに見えたその空家の庭からとうとう立ち去つたのである。

少年はその家を遠ざかるにつれ、つくづく自分^③に冒険心の足りないことを悲しむばかりであった。そうしてその辺の外国人^④留地^⑤かも知れない洋館ばかりの立ち並んだ見知らない町の中を少女と肩をならべて歩きながら、そういう弱虫の自分に対して自分自身で腹を立ててもいるかのように、急に何時^⑥になくおしゃべりになった。

「君、メリメエという人の小説を読んだことがある？」

「いいえ、ないわ」

「そうかい、僕はその人の小説がとても好きなんだがなあ……僕はその人の短篇^⑦でね、『マダム・ルクレエス街』というのを読んだことがあるんだ……その中にね、丁度、今みたいな家が出てくるんだぜ、それは伊太利^⑧の話だけれど……ところがその空家の二階の長椅子がね、一つだけ埃がちつとも溜^⑨まっていなくて、何だか始終人に使われている見たいだったんだ……実はそこでね、毎晩あるお姫様がその恋人とあいびきをしていたということが後でわかるんだよ。そう云えば、今のあそこの二階もね、僕は何だかそんな秘密でもありそうな気がしてならなかったよ……やはりさつき上って見ればよかったなあ……」

「まあ……」少女はそんな突拍子^⑩もない少年の話を聴きながら顔を真っ赤にしていた。それに気がつく、少年も顔を真っ赤にした。——そうしてしばらく気まり悪そうに二人は黙って歩いて歩いたが、今度は少女の方が口をきいた。

「あなたは随分空想家ね」

「そうかなあ……」どうもこれは少年の口癖のように見える。

（『新潮日本文学』16 堀辰雄『所載の「あいびき」に拠る。なお、本文を変更した部分がある。』）

〈注〉 露台—バルコニー。

問一 傍線部⑦、⑧の漢字の読みを平仮名で書け。

問二 傍線部①「絵のような空家とその庭」とあるが、なぜ「絵のような」と形容されているのか、理由を説明せよ。

問三 傍線部②「最初見たときふと彼等の心に浮んだ或る考え」とは具体的にどのような考えか、説明せよ。

問四 傍線部③「自分に冒険心の足りないことを悲しむばかりであった」とあるが、なぜこのような表現をしているのか、説明せよ。

問五 傍線部④「随分空想家ね」とあるが、少女はなぜこのように言ったのか、理由を詳しく説明せよ。